

『可視性をめぐる闘争』

—戦間期ドイツの美的文化批判とメディア [前田良三 著]

(三元社, 2013年)

山口裕之

ワイマール時代は、周知のように、ドイツの文化を取り上げるときにとりわけ主題となることの多いエポックである。標題に示される「戦間期ドイツ」という時代区分は、いわゆる「ワイマール時代」と言い換えることができるかもしれない。しかし、この時代における広義のメディア、視覚性の問題に焦点を当てようとしている著者は、おそらくこの時代の文化・社会を「ワイマール文化」として描き出す既存の文化史的イメージから、なんとしても距離をとりたいと考えていたのではないかと想像している。

全体は大きく3部から構成され、第I部「可視性をめぐる闘争」では、ジンメル、ゲオルゲ、エルンスト・ユンガー、クラカウアーを取り上げつつ、おもに20世紀前半のドイツにおける社会の変容とそれともなる視覚体験の新たな組織化が、どのように言説のうちに組み込まれているかをたどっている。クラカウアーをのぞいて、その他の著作家・思想家においては視覚性をめぐる問題は、一般にそれほど明示的に現れているわけではない。しかし著者は、ゲオルゲ、ユンガーに見られる「ゲシュタルト」の概念に焦点を当てることによって(ときには美術史理論家ロザリンド・クラウスの概念を補助線としつつ)、これら4人の思想家たちの言説を一つのイメージ変容の連関のうちに描き出していく。「ゲシュタルト」とともに、この第I部の理論上のキーワードとなっているのが「平面」という概念であるが、これについては後で再びふれることにしたい。

第II部「想像界^{リマジンール}—鉄道の・映画の」には五つの章が含まれている。これらを貫いているのは、鉄道という近代の技術的メディアによって知覚の変容がもたらされ、それがテキストとしてどのように言説化されているかという関心である。ここでは文学テキスト(森鷗外、内田百閒も取り上げられる)、同時代のポスターとともに、もちろん技術的相関項をなす映画(例えば有名なW. ルットマンの『柏林—大都会交響楽』)は決定的に重要なメディアとして言及されることになる。少し意外で非常に興味深かったのは、クラークスの『リズムの本質』を鉄道および映画のリズムと関連づけて論じている章である。クラークスは、同時代のいわゆる「保守革命」の思想に見られる科学技術の進展や合理主義的近代観に対する批判を典型的に体现する思想家という側面を明確にもつ。まさにそのような思想家において技術による知覚変容がどのように言説化されていたかを検証すること

は、この主題圏にとっては非常に重要な作業であるといえることができるだろう。

最後の第三部「視覚のトランスカルチュラル」は、映画における字幕、および画像的視覚メディア（新聞から漫画まで）における二次元性＝平面性をそれぞれ主題とする二つの章からなる。字幕という映画にとっては「周縁的な出来事」によって、ベンヤミンの複製技術論のテーゼとは一見反対のようにみえながらも、日本での「洋画」において「アウラ」が生じているのではないかという挑発的な問いかけが、一つ目の章では提示されている。（ただし個人的には、洋画における「アウラ」といわれているものが、果たして「アウラ」なのかという素朴な疑問が感じられると同時に、本来「アウラ」が消滅するはずの映画という技術メディアにおいて、技術性の反対物である「アウラ」が出現する理由は、単に文化批判的なコンテクストに求められるというよりも、むしろ技術そのもののうちにそれが本質的に内在しているということに起因するのではないかと感じられた。）二つ目の章では、「脱書物化」した画像としての新聞、ポスター、雑誌などの実用的グラフィック、ルットマンの映画に対置されるモホリ＝ナジの『大都市のダイナミズム』、そして最終的には漫画・アニメにまで、二次元性をめぐる考察はさまざまなメディアを横断する。本書全体がまさに「トランスカルチュラル」なまなざしによって貫かれているのだが、この第三部はとりわけ明確に複数の視覚メディアにまたがる考察となっている。

本書の構成や概要をざっと見渡してきたが、「戦間期ドイツの美的文化批判とメディア」をめぐり、これらのきわめて多様な領域、思想家・作家・芸術家のあいだを横断する考察は、はじめにも言及したように、単にこの「ワイマール時代」におけるさまざまな文化現象の一断面として提示されているわけではなく、むしろまさにメディアと視覚性をめぐる問いのまわりに、これらの個々の論考がいわばモザイクの断片のように集まっているといえるだろう。「戦間期」という、標題での比較的明示的な時代区分にもかかわらず、本書で取り上げられているいくつかの事象は、むしろすでに20世紀初頭、あるいはそれ以前からこの主題圏のなかに入り込んでいる（そのことは著者自身、序文のなかで言及している）。それはごく自然なことであって、新しいメディア技術により知覚のパラダイム転換が生じるのは、「戦争」によって規定されるものというよりも、もっと一般的なコンテクストにおける社会やメディアの変質と深く関っているからだ。そのような視点から、本書では「匿名の群衆に満ちたショック体験の空間」としての「大都市」という現象や、「鉄道旅行、電信技術によって、主体の知覚から安定した時空感覚が一時的にせよ奪われる」体験や、「写真をはじめとする新たな視覚メディアの実用化」によって「イメージの洪水」が出現する状況を全体としてとりあげている。「社会の広範な領域におよぶ知覚体験のこのような変化」に対する視点は、本書の多くの部分で通奏低音となっているヴァルター・ベンヤミンの複

製技術論と基本的なスタンスを共有している。もちろんベンヤミンや同時代人のメディア的思考のなかにとどまるのではなく、フリードリヒ・キットラー、ノルベルト・ポルト、ヴィレム・フルッサーといったドイツ語系メディア論の大御所たちの思考を自家菜籠中のものとしていることも、これまでさまざまなメディアの現象に多彩に関り、メディア理論のコンテクストを扱ってきた前田良三氏ならではの手際といえるだろう。

本書にはほかにもいくつかの重要な理論的バックボーンがあり、それらをいわば「地」のように遠方に見据えながら、現象の空間のなかを自由に泳いでいるかのような感覚が、この著作を読む時に感じられる。そのような「地」の一つが、ジョナサン・クレリーの二つの主著であり、あるいはロザリンド・クラウスをはじめとする美術史を軸足とする視覚論である。視覚論、あるいはより広いコンテクストで知覚論をとりあげるとき、クレリーのテーゼは必ずといってよいほど言及されるものとなっているが、本書ではその単純な延長上で論議が進められているわけではない。しかし、現代の視覚文化に引き継がれているようなある決定的な切断面を、意外なほど早いエポックに求める設定の仕方についても、クレリー的な枠組みが継承されているように思われる。「(…)本書がなお二〇世紀の平面的視覚性をひとつの歴史的まとまりとして主題とするのは、私たちをとりまく現代の視覚文化—あるいは視覚化された社会そのもの—と比較しうるほとんど唯一の状況を、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのヨーロッパに確認できると考えるからである。」つまり、われわれの現代の文化（とりわけ日本）において際立った特徴をなしていると著者がとらえている「平面的視覚性」（これは「内面から外面への展開」という思想的な切断のあとに生まれたものと位置づけられている）は、百年前のヨーロッパにおいてすでに重要な契機となっていたということである。ここでは「ヨーロッパ」とされているが、別の箇所ではむしろそれはまさにドイツ的な現象であるかのようにも提示されている。「実は、社会と文化の変容をめぐる言説や表現がさまざまな局面で「平面性」という主題と深く結びついていた社会が、〔現代の日本の〕ほかにも存在する。二〇世紀前半のドイツである。」それこそがまさに、「戦間期ドイツ」における「可視性をめぐる闘争」を主題化している本書の立ち位置である。そして、それこそが本書の各章で論じられている個別のトピックスに、きわめて興味深い位置づけを与えているものである。しかし、視覚文化における切断面というより包摂的な考察へと論を展開させるとすれば、それは必ずしもドイツ特有の現象と限定しないほうがむしろテーゼとしてより有効であるのかもしれない。

そのように考えるとき、本書のなかでダダを扱う章がまったく存在しないというのは、少し意外でもある。ダダはドイツ語圏を中心にして展開しているという意味では、前言を自ら覆すように見えるかもしれないが、確かにドイツ的な現象

であるのかもしれない。しかし、彼らが伝統的な芸術概念を完全に破壊しようとしたとき、そこでは同時に伝統的な視覚性の連関が解体されていたのでもあり、その根本的な破壊力は当然ながらドイツ語圏にとどまるものではない。まさに本書で取り上げているような「平面的展開」の最も顕著で、最もダイナミックな運動体であるように思われる。そしてそれは、ドイツ語圏に限らず、歴史的アヴァンギャルドにある程度共通する切断面として考えることができるのかもしれない。(アヴァンギャルドにおける視覚の伝統の切断というテーゼを、むしろありきたりのものとして避けたのだろうか。)

本書の各章を構成するテキストは、もともと、それぞれ異なる機会やコンテキスト、さらには異なる言語(日本語・英語・ドイツ語)で書かれたものである。そのために全体を貫く「戦間期ドイツ」における「可視性をめぐる闘争」という主題への収束の度合いはやや緩やかだという印象を受ける。ちなみに、本書の標題として掲げられている「可視性」という概念は、最後まで疑問の残るものだった。「可視性」という言葉は、文字どおりにとれば、視覚でとらえることができるかどうかの問題とされていることになる。しかし、本書で主題化されているのはむしろ、著者自身が何度も繰り返しているように、「平面的視覚性」という特質である。この言葉は標題としてはなじまなかったということだろうか。それはともかくとして、各章が扱うそれぞれの主題が全体として構築的な有機性を必ずしももつものではないということは、むしろ扱う対象の本質(あるいは通奏低音をなすベンヤミ的な思考)に必然的に即応したものであるということができるかもしれない。いずれにせよ、個々の論考はさまざまな領域・文化圏を自由に行き来する、きわめて刺激に満ちたものである。本書のなかで次々と提示される幅広い視点と浩瀚な知識、異なる領域を軽やかに結びつけてゆく手腕には、ただ感嘆するしかない。もう一つ、本書を特徴づける重要な点がある。それは、単に異文化研究的なまなざしによって対象を捉えているのではないということだ。そこにはつねに方法論的な意識として、相関項としての「日本」が存在する。そのこともこれまでの前田良三氏の研究を一貫して貫いているものであり、一見、個別の研究が比較的緩やかに収束しているかのように見えるこの著作も、まさに対象と方法とを体現するものとなっているといえるだろう。